

奥積雅彦（総務省統計研究研修所教官）

実は貴重な統計史料が個人の端末で利用できます（つづき） —山中四郎遺稿集なども可能に

1 はじめに

2022年5月31日の国立国会図書館のインフォメーションに、「図書約30万点を「国立国会図書館デジタルコレクション」に追加しました。」とする記事があり、同記事によれば、「追加した資料は、令和2年度補正予算によりデジタル化を実施した国内刊行図書で、1969年から1987年までに整理された資料です。現在、これらはすべて国立国会図書館内限定公開資料ですが、所定の手続を経て、絶版等で入手困難であることが確認された資料については、2023年1月から図書館向け・個人向けデジタル化資料送信サービスの対象に追加する予定です。」とあり、その図書約30万点を抽出した国立国会図書館デジタルコレクションのサイトにリンクがはられ、「統計局」、「日本統計協会」をキーワードとしてヒットした図書については、統計図書館コラム>ピックアップ・コラム 参考資料【号外】「実は貴重な統計史料が個人の端末で利用できます」で紹介したところ。ただ、その図書約30万点の中には、「統計局」、「日本統計協会」のキーワード以外でも統計関係の貴重な史料があると予想しました（筆者の低性能な脳内における根拠のない無責任な勘に基づくもの）。さりとて、どうやって探したらいいかわからず、モヤモヤし、ムダに時間を浪費し、前掲のコラムの公開後は、モヤモヤしていたことさえも忘れ、ワークライフバランスの名目で頻繁に休暇を取得し、脳の静養につとめました。

休暇中（脳の静養中）、40年以上前に筆者が半年間、脳外科・整形外科病棟に入院していたときのことを想起しました。筆者のこれまでの人生で最も脳の静養に専念できた時期でもあります。入院中、最初の1か月ほどは集中治療室、その後、個室的な病室を経て、大部屋に移りリハビリに専念。その際、隣の病床の患者さんとの雑談で、その人が「統計、やった」とおっしゃっていて、最近、そのことが気になり、名字しか記憶になく、インターネットで探索するも、探索の過程で、戦後の統計制度の再建、特に統計法制度の関係を調べていくうちに、もしかしたら、その人と同一人物かもしれないと予想するも、手がかりとなる情報があまりに少なく、手詰まりに。

その過程で、杠文吉氏や山中四郎氏などが登場しました。杠文吉氏については、統計図書館コラム【特別編】No.S03「本邦初の統計用語辞典を編集した杠文吉」の執筆に際して、筆者の脳内の低性能なCPUに常駐していたのですが、山中四郎氏については、旧統計法の起草に従事した方という記憶はあるものの、筆者の脳内にそれ以上の情報は、常駐していませんでした。そうすると、そもそも当初に何を調べようとしていたのかも忘れ、とにかく山中四郎氏の人となり調べてみたいと思うに至りました。

国立国会図書館デジタルコレクションで「山中四郎」をキーワードとして探索したところ、「山中四郎遺稿集」に出会いました。出版時期が1977年で、公開範囲が「国立国会図書館内/図書館・個人送信限定」とされ、全文検索機能が利用できないコンテンツでした。

要するに、本年（令和5年）4月までに「山中四郎遺稿集」という貴重な統計史料が個人の端末で閲覧可能となったと考えられます。

2 山中四郎遺稿集とは

『山中四郎遺稿集』¹は、山中四郎遺稿集刊行会により、1977年5月に刊行されました。同書の刊行の経緯については、全国統計協会連合会『統計情報』（1977-05）²に掲載されていますので、ここに転載します。

¹『山中四郎遺稿集』

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/12224503> 国立国会図書館内/図書館・個人送信限定で閲覧可能

²『統計情報』（1977-05）

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2651447> 国立国会図書館内/図書館・個人送信限定で閲覧可能

■『山中四郎遺稿集』の刊行の経緯

昭和 22 年に制定された旧統計法は、当時の統計委員会事務局によって起草されたが、山中四郎氏は、統計委員会創設当初からその事務局に勤務し、のち総務課長として、統計法の起草から初期の運用に至るまで、実質的な責任者であった。

氏は、原爆症のため昭和 23 年 12 月に 38 才をもって永眠されたが、この遺稿集は、氏の遺した日記、書簡、論文を中心に、氏の業績をしのぶ人々が相集まって刊行したものである。あたかも統計法制定 30 周年の時にあたり、統計法制定前後の事情をかえりみる資料として、貴重な資料である。・・・(以下略)・・・

3 山中四郎(1910-1948)氏のプロフィール

明治 43 年(1910 年)満州生まれ。昭和 10 年(1935 年)東京帝国大学経済学部経済学科卒業後、南満州鉄道入社。明治 15 年池田壽子と結婚。翌年内地に戻り興亜院(のちの大東亜省)に転じ、官界に。大東亜省在籍中の昭和 20 年(1945 年)8 月、広島に出張し、被爆し、休職。翌年(昭和 21 年)職場復帰。同年 3 月、内閣参事官(内閣審議室)勤務となり、上席の橋井首席審議官に統計制度の整備の必要性を上申。統計基本法の起草をはじめ統計改革の仕事の中心的役割担うことに。同年 10 月壽子夫人死去。同年 12 月統計委員会事務局勤務。昭和 22 年、経済安定本部総裁官房統計課長、統計委員会事務局総務課長、総理庁統計局総務課長(兼務)等を歴任。翌年 12 月細網肉腫症のため死去。³

4 山中四郎氏の著作等

【著作】(日本統計協会『統計』に所収分)

・山中四郎『統計制度改善の當面の諸問題』(日本統計協会『統計』(10)(1948-01)所収)

・山中四郎『表学から国際センサスまで』(日本統計協会『統計』(12)(1948-06)所収)

【遺稿】

・『山中四郎遺稿集』(1977-05) (前掲) (日記、書簡、論文等が所収されています。)

→死去を伝える新聞記事も所収されており、読売新聞昭和 23 年 12 月 16 日号の見出しは「統計制度の親近く」「原子病の尊き犠牲?」とされています。当時の新聞記事では、原爆症による死亡である旨を明らかにすることは禁止されていたことが注記されており、記事の見出しで「原子病の尊き犠牲?」というのがギリギリの表現であったように理解しました(筆者の低性能な脳内における個人的な見解です。)

・山中四郎、河合三良 共著『統計法と統計制度』(1950 年)

→序文は、大内兵衛(当時の統計委員会委員長)による。(山中四郎氏の功績が紹介されています。大内兵衛も彼の功績を高く評価していることをうかがい知ることができます。)

(序文) 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1152950/1/4> 国立国会図書館内/図書館・個人送信限定で閲覧可能

5 衆議院本会議で統計法案が可決する見込みとなった前日の山中四郎氏の日記

『山中四郎遺稿集』に所収の日記で印象的なのが衆議院本会議で統計法案が可決する見込みとなった前日の日記(当該日記では「3月17日 日曜」と活字化されていますが、同日は月曜日であることに留意する必要があります。)

ここで、当日の日記の一部を抜粋して紹介します。亡き妻への感謝、本人の体調を想像するに生命を賭して法案の起草に取り組んだことをうかがい知ることができます。

・・・統計法案は先月(昭和 22 年 2 月)二十八日に貴族院に、提出、愈々(いよいよ)明日衆議院本会議に上呈されて可決されることになった。」「生まれて初めての法律勉強で作り上げたこの法案は誰よりも壽子に見て貰いたい。壽子に自慢話をして褒めて貰いたいものだ。仏壇に法案を供えて経を読む。・・・」「自分の一生において記念となり、国の歴史の上にも足跡を残すこの仕事の成る日、歡びに非ずして静寂に沈む。人生は遂に仕事ではない。・・・

同日の記事は、全国統計協会連合会『統計情報』5月/6月 46(541/542)(1997-05)(統計法施行五十周年記念)に所収の河合三良「山中さんのこと」、全国統計協会連合会『統計情報』(1987-06) > 「座談会 統計法制定時の回想と今後の展望—統計法施行 40 周年を記念して」における森田優三(元統計局長、元統計審議会会長)の発言において紹介されています。また、『山中四郎遺稿集』の編集を担当した奥野定通⁴が日本統計協会『統計』28(5)(1977-05)に投稿した「山中四郎の 1000 日」においても同日の記事が紹介されています。

6 おわりに

日本統計協会『統計』2月(1949-02)の編集後記⁵に美濃部亮吉(当時、統計委員会事務局長、元東京都知事)の

³【参考資料】前掲の『山中四郎遺稿集』に所収の年譜、全国統計協会連合会『統計情報』(1987-06) > 「座談会 統計法制定時の回想と今後の展望—統計法施行 40 周年を記念して」

⁴ 奥野定通 大正 15 年(1926 年)富山県生まれ。昭和 23 年(1948 年)東京大学法学部卒業。同年統計委員会事務局に入る。その後、行政管理庁統計基準局、臨時行政調査会調査員、東京都立中央図書館長を歴任。

【参考資料】奥野定通 著『統計調査員の手びき：管理と実務』(1963 年)等

⁵ 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2780293/1/34> 国立国会図書館内/図書館・個人送信限定で閲覧可能

故山中四郎氏の追悼に係る記事が掲載され、行政管理庁『行政管理庁史』(1984.6)⁶に美濃部亮吉のコラム「統計委員会の思い出」があり、その中で山中四郎氏の功績を紹介しています。これらの記事からも彼の功績を高く評価していることをうかがい知ることができます。また、同記事から美濃部亮吉は父達吉(法学者・憲法学者)にも統計法案について、助言を求めたことが分かりました。

ちなみに、杠文吉を統計委員会に迎える際、美濃部亮吉(当時、事務局長)は、杠に対し、「何かむずかしいことがあったらおやじ(達吉さん)に聞いてくるから・・・」⁷と話をしたそうで、美濃部亮吉は父達吉に実際に助言を求めていることがわかりました。

そして、筆者は、機会あるごとに山中四郎氏の功績を後世に伝えていくことにつとめることを決意しました。

【あとがき】

『山中四郎遺稿集』の巻頭に山中夫妻の写真(昭和15年、北京で撮影)が掲載されており、その編集を担当した奥野定通が日本統計協会『統計』29(10)(1978-10)に投稿した「中国の図書館を訪ねて」の記事から、その写真は、北京の北海公園の九龍壁の前で、新婚間もない山中夫妻を撮影したものであることが分かりました。

【余談】

40年以上前に筆者が入院していたときに、隣の病床で「統計、やった」とおっしゃっていた人が誰だったのか、今回の調べものでも何も分かりませんでした。引き続き、あきらめずに気合いと手探りで調べる努力をしたいと思います。

⁶ 行政管理庁『行政管理庁史』(1984.6)に所収の美濃部亮吉のコラム「統計委員会の思い出」
国立国会図書館デジタルコレクション 国立国会図書館内/図書館・個人送信限定で閲覧可能
<https://dl.ndl.go.jp/pid/11934513/1/245>

一口メモ 『行政管理庁史』も本年(令和5年)4月までに個人の端末で利用可能となりました。

⁷ 統計数理研究所学術研究リポジトリのサイト「日本における統計学の発展 第17巻」(1981)における杠文吉へのインタビュー記事による。 <http://hdl.handle.net/10787/3796> (8コマ目)